



すゝめ

患者さんと慶應義塾大学病院をつなぐ
コミュニケーションマガジン



1号館開院 ～2018年5月7日～

緑豊かな自然に囲まれた信濃町に新しく完成した慶應病院1号館は、患者さん中心の医療を提供するため、各診療科が連携できるように設計されたフロア構成となっています。

1階カフェラウンジも慶應義塾の杜Keio Forestを象徴する安らぎの空間です。院内随所に樹木、葉のモチーフが溢れます。



2018年、慶應看護は
開設100年を迎えました

広報誌タイトル「すゝめ」とは

タイトルは明治5年から9年にわたって出版された17編を数える
福澤諭吉の大ベストセラー『学問のすゝめ』に因んでいます。

KEIO
UNIVERSITY
HOSPITAL
Communication
Magazine

Vol. 05
June 2018

ご自由に
お持ちください

メディカルストリート

1号館と2号館を結ぶ連結通路であり、メイン通路であるメディカルストリートは、壁面のスリット状のライトが木々の間から差し込む陽射しのように穏やかな光を放ちます。ストリート沿いにカフェ(1階)や売店(2階)を配置しています。



慶應義塾大学病院1号館(新病院棟)紹介

2018年5月7日(月)、地上10階、地下1階、免震構造を患者さんに寄り添う、安全安心な

もつ災害に強い都市型地域医療拠点として稼働開始。医療の実現を目指してまいります。



ホスピタルモール

メディカルストリートに交差するホスピタルモールは外来のメイン通路です。木漏れ日のさす並木をイメージし、木質で落ち着いたインテリアを基調とします。外来診療や検査の受付は、モールに面したブロック受付で行います。

授乳室
Nursing room

おむつ替え
シート
Sheets used when
changing a diaper



産科病棟

病棟内部はピンクを基調とした柔らかな雰囲気デザインとなっています。ラウンジには梅の花を散りばめた壁紙を使用しています。退院時には壁紙を背景に、ご家族の皆さんで記念撮影をしていただけます。



B-1
相談室
Consulting Room

B-2

B-3

中待合

樹木や木の葉をイメージした安らぎを与える明るい待合空間です。モチーフとなる樹木は待合によって異なります。



手術室

ハイブリッド手術室ほか、最新の医療技術・ロボット支援手術に対応した設備をもつ手術室25室を備えています。ICU・HCU(4階)、手術室フロア(5階)、周産期エリア(6階)は1階救急エリアと専用エレベーターで直結しています。



患者さん一人ひとりに 最適ながん治療を

放射線治療は体の外から放射線をかけるため、従来の方法ではどうしても正常組織を傷つけてしまうことがありましたが、その問題を克服したのが、IMRTという技術です。CTを撮像して治療計画を行います。まず放射線をかけたい腫瘍の範囲をCT画像上で設定します。リンパ節転移の可能性が高い場合はその範囲も含めます。さらに放射線かけたくないリスク臓器も設定します。これを治療計画装置に入力すると、腫瘍に高い線量、リスク臓器には出来る限り低い線量となる照射法が提示されます。医師はこれまでのエビデンスや経験、患者さんの状態に合わせてさらに照射野の修整を施行し照射線量を決定します。IMRTを用いると、腫瘍の形に合わせて理論的にはどのような形状

の照射野も作成できます（ハート型やドーナツ型など）。放射線が腫瘍にかかからないことで副作用が圧倒的に軽減されるため、総線量を増大することができます。たとえば前立腺がんの場合、2 Gyの照射を30回から40回に増大させたことで、5年生存率が10%近く改善しております。また慶應病院では照射装置を患者さんの周りを回転させながらIMRTを行う方式を用いて、短い照射時間で、一度で多数の病変を治療できる技術を可能にしています。

これまで放射線治療は、高齢者や他の病気があるなどで手術ができない場合に行っていることが多かったのですが、放射線治療は年齢やがんの部位に関係なく、どのようなステージでも可能で、局所の制御率は手術に匹敵す

る治療成績が多くの腫瘍で報告されています。IMRTなどの新しい技術を用いると、放射線による副作用も軽減され、合併症も少なく外来での治療も可能です。IMRTは、頭頸部

がんや前立腺がんによく行われていますが、当院では臨床的に意義があると判断すれば積極的にすべての領域のがんに用いています。

正常組織を避け腫瘍に 集中して照射できる 放射線治療技術を 導入しています



放射線治療科 医師
茂松 直之



専門医が語る 慶應義塾大学病院の がん治療の“今”

血液がんの患者さんの 人生にとって最適な “個別化”治療を チームで提供します



血液内科 医師
岡本 真一郎

全身に分布する造血組織から発症する血液がん（造血器腫瘍）には、転移

な治療を計画することを目指しています。

という概念はありません。従って、外科的切除や放射線治療ではなく、造血幹細胞移植を中心とする強力な化学療法がその治療の中心的役割を果たします。私は米国で医師としての研鑽を積み、1992年から慶應病院血液内科で造血幹細胞移植を中心とした血液がんの治療に取り組んできました。そして多くの患者さんの治療に携わり、当院は造血幹細胞移植を含む血液がんの治療において日本のトップレベルの実績を誇るに至っています。白血病やリンパ腫などの血液がん細胞は、血液や骨髄から容易に採取できるので、細胞を詳細に調べることによってその弱みを知り、血液がん細胞を選択的に攻撃する分子標的薬が開発されています。私たちは、このような新規薬剤による治療にも積極的に取り組み、多様化する治療法の中から、患者さん一人ひとりにとって最適

な治療を計画することを目指しています。全身が病巣となる造血器腫瘍の治療では、治療そのものが致死的合併症や、根治が得られた後のQOL（生活の質）の低下に繋がることもあります。また、高齢化、核家族化が進む社会では、患者さんの人生観や、患者さんを支える家族にかかる負担を避けて通るわけにはいきません。これらの課題を克服するために、私たち医師は、看護師ほか様々な医療専門家との連携を進めてきました。そして今では、患者さん、家族をサポートする多職種よりなる、世界に誇れる血液がん治療チームが編成されています。私たちは病気の根柢だけでなく、スタッフの総力を結集して患者さんの人生そのものに寄り添い、個々の患者さんの人生の目標達成、完璧な社会復帰を目指した、個別化治療を行っています。

子宮や卵巣にがんが見つかった場合でも 将来の妊娠・出産といった QOLに配慮しつつ治療します



産婦人科 医師
あおき だいすけ
青木 大輔

婦人科のがんには、子宮の入り口にがんができる「子宮頸がん」と、子宮の内部にできる「子宮体がん」があり、「卵巣がん」を含めた3つのがんのそれぞれの発症数はほぼ同じです。子宮頸がんは30代から多く見られるようになり35〜40歳でピークを迎えます。浸潤子宮頸がんでは、子宮全摘を含む病巣の摘出がその治療の基本になり、進行状況によっては放射線を照射したり抗がん剤による化学療法を行います。当院では、妊娠を望まれる若い方で腫瘍径が2cm以下の場合には子

宮頸部のみを広汎に切除して子宮体部を温存する手術を行い、将来の妊娠・出産を可能にしています。一方、子宮体がんは50代に多く、その75%は閉経した女性です。手術療法が基本で子宮と卵巣の摘出を行います。比較的早期の場合は侵襲の少ない腹腔鏡下手術で行うので、一週間程度で退院できます。また、40歳以下の若年の方でごく早期の子宮体がんであれば手術せずに黄体ホルモンの大量投与でがんを消すことができ、4分の1程度の患者さんが妊娠・出産を実現していま

す。子宮頸がん、体がんともに治療後に妊娠を目指す場合には、体外受精をはじめとした生殖補助医療や産科的（周産期）管理が必要ですが、当院では婦人科と生殖、産科の各部門が連携して適切な治療を提供できる点が強みです。また、子宮体がんでは約5%、卵巣がんも10〜15%は、遺伝的な要因によって発症することが知られています。現在では、それらの原因となる遺伝子変異を調べることができます。臨床遺伝センター外来と連携し、適切な遺伝カ

ウンセリングを提供するとともに、見つかった場合はご家族にも十分配慮し、発症リスクの低減対策を講じます。



チームワークで がん治療に臨み 遺伝子パネル検査にも 取り組んでいます



腫瘍センター 医師
はまもと やすお
浜本 康夫

腫瘍センター 医師
にしはら ひろし
西原 広史

がん治療には手術だけでなく化学療法や放射線治療もあります。また、がんの中には胃がんなのか肺がんなのか特定できないにも関わらず（原発不明がん）、すでに全身に転移しているタイプもあります。その場合、患者さんの中には消化器内科や呼吸器内科を訪れても受け入れてもらえず、結局どの診療科に行けば良いのか分からなくなってしまうような経験をお持ちの方もいらっしゃるでしょう。そのような状況を防ぐためにも、がん治療を行う病院は臓器単位や外科・内科といった枠を超えたチームワークが大切です。慶應病院では、「腫瘍センター」の専門医がそれぞれのがん患者さんに適した治療を行うためのチームを編成し、痛みを和らげるケアや精神面でのサポートを行い、必要に応じて、診療科の枠を超えて、手術や放射線治療の専門家に依頼いたします。また近年の研究により、がんはさまざまなたな遺伝子の異常が積み重なることで発症する、いわば「遺伝子病」であることが分かってきました。現在、人間が持つ約2万個の遺伝子の中から、がん治療に重要だと思われるものを

数百個選んで調べる「遺伝子パネル検査」が徐々に行われています。当院でも国が認定した全国11カ所の「がんゲノム医療中核拠点病院」として、患者さんの日常の検査の中に遺伝子パネル検査を組み込む体制を整えつつあります。遺伝子を調べれば必ずしも適切な治療法が見つかるというわけではありませんが、原因が明らかになることでより良い治療を期待することができます。薬の反応や合併症にも個人差がある複雑ながんに対し、当院は総合病院としてのパワーを結集して全力で治療に取り組んでまいります。



“生きる力”を支え、 子どもが元気に育つことを願って



小児外科 医師 **星野 健**

認定レシピエント移植コーディネーター・看護医療学部教員 **添田 英津子**

認定レシピエント移植コーディネーター・看護師 **伊澤 由香**

新生児や乳児期によく見られる胆道閉鎖症という病気にかかると、昔は手術をしても3分の1は2〜3歳まで、長くても30〜40歳までしか生きることができませんでした。しかし、20年ほど前から命を落としそうになり子どもを肝臓移植で救えるようになり、近年、慶應病院で胆道閉鎖症の手術をした子どもは100%生存しています。私たちは、子どもが病気のことや手術で辛い思いをしたことを



忘れるほどに元気になって、いわゆる「究極のQOL（生活の質）」を獲得してほしいと願っています。肝臓移植を受けると、拒絶反応を抑えるために免疫抑制剤を一生飲み続けなければなりません。ところが、多くの子どもが元気になると薬を飲むことを忘れてしまい、服用を止めたとたん一気に調子が悪くなるケースがしばしば見られます。そこで、外来では見ることのできない日常生活の様子を探りながら、子どもたちの「生きる力」を支えようと、2015年から慶應大学赤倉山荘において2泊3日の「慶應スノーキャンプ」を開催しています。親から離れて寝食を共にし、よくしゃべり、よく笑う屈託のない子どもたちの姿は感動的であり、子ども自身が「究極のQOL」を体験していることが手に取るようにわかります。2018年は当院で肝臓移植を受けた子どもと家族によるリユニオン（同窓会）を体育館で行い、スポーツを楽しみながら同じ経験を持つ者同士のコミュニケーションの輪を広げました。当院は移植施設である前に先進的な



小児外科施設です。その先進的小児外科手術をもってしても救えない命に対して、移植医療を導入し、子どもたちの生涯をサポートしています。とりわけ、レシピエント（臓器を受け側）の生活状況だけでなく、ドナー（臓器を提供する側）となる親の不安や家庭環境まで把握している移植コーディネーターの存在は、チームで取り組む医療に欠かせないものとなっています。私たちの仕事は、子どもたちが当たり前のように享受できている幸せをすべての患者さん感じてもらうことにあります。今後も「とにかく元気に育ってほしい」と願うご家族と同じ気持ちで小児医療に取り組んでまいります。

「がん相談・治療支援」 患者さんも「チーム医療」の一員です



がん専門相談員・看護師
谷合 美樹

がん専門相談員・ソーシャルワーカー
久住 真有美

がん専門相談員・がん化学療法看護認定看護師
北村 悦子

がん専門相談員・看護師
高橋 一寿子

1990年代から抗がん剤の種類が増加し、治療方法も多様化していることから、完全に治すことができない場合でも延命効果が得られるようになりました。その反面、副作用と長く付き合わなければならなくなり、治療を続けるために、仕事、生活面などさまざまな問題が生じています。そうした状況の中で、慶應病院は地域がん診療連携拠点病院として、「電話・対面による相談対応」「テーマごとに講義と交流会を行う患者サロン」「がんに関する書籍や資料を揃えたがん情報コーナー」を3本柱に、「がん相談支援センター」を設置しています。患者さんやご家族だけでなく、ご本人でも無料でご利用でき、相談内容が本人の同意なしに他者に知られることもありません。また匿名での相談も受け付けています。

相談対応しています。患者サロンで講義を行うのは、当院で実際にがん治療に携わっている医師や看護師、薬剤師、管理栄養士等です。「こんなことを聞くと、担当の先生がよく思われたいのでは」と躊躇してしまう方や、ご自身の症状をうまく医師に伝えることができない方も気兼ねなくご相談ください。私たちが皆さまの悩みや希望を伺い、解決に向けての道筋を共に考えていきます。時には主治医の先生への伝え方を共に考え、より良い治療・療養ができるようにサポートいたします。当院で治療を受けている方であれば、診察の際に外来の看護師が同席することも可能です。患者さんが治療に伴い生じた症状等を把握し、自分の言葉で医師に伝えられることは大切なことです。医師に響くのは患者さん自身の言葉です。直接医師に伝えたことで新たな対策が講じられ、良い結果に結び付いた例も少なくありません。患者さんには単に治療を受けるだけでなく、チーム医療の一員として参加していただき、共に協力し合うことでより良い方向に進みたいと考えています。

Information

1号館の全面運用開始とともに、安全安心な医療環境を提供するための措置として、当院正面玄関の開場時間を朝6時45分としております。再診受付開始の7時45分までの間は、限られたスペースで恐縮ながら、院内の待合席で待機していただきます。皆さまのご理解と更なるご協力をいただきますようお願い申し上げます。

外来診療や検査の受付はホスピタルモールに面した「ブロック受付」で行っています。患者さんの診療時間の15分前から受付しておりますので、それまではラウンジ等にてお過ごしください。また、エクスプレス会計による後日自動引落しも可能です。今後も患者さんから頂いたご意見を病院運営に活かしてまいります。

「患者サロン」開催

がん患者さんとご家族、ご友人を対象としたセミナー・交流会を定期的に開催しています。どなたでもご参加いただけます。(参加費・無料)

開催日	テーマ	講演	交流会	時間
6月19日(火)	女性のつどい		○	午後2時00分～ 午後3時00分
7月5日(木)	がん治療をささえる 口腔ケア	○	○	午後2時00分～ 午後3時30分
7月28日(土)	乳がん治療とくらし、仕事	○	○	午前10時00分～ 午前11時30分
9月4日(火)	主治医に聞きたいことを 聞くコツ ～抗がん剤治療と副作用～	○		午後2時00分～ 午後3時30分

がん患者さんと子どものサポートプログラム 参加者募集 (SKiP 主催)

①「夏休みキッズ探検隊」

日程：2018年8月25日(土) 13時30分～15時00分
対象：家族(親、きょうだい、祖父母)ががんで治療をしていることの説明を受けている「小学生・幼稚園年長のお子さま」

②「CLIMB®プログラム」

日程：2018年10月21日～12月2日
毎週日曜日 10時00分～12時00分(全6回)
対象：親が当院でがん治療を受けていて、親の病気の説明を受けている「小学生のお子さま」

※プログラムの詳細は慶應病院ウェブサイトでご案内予定です(随時更新)。



スマートフォン用
QRコード

お申し込み・お問い合わせ
がん相談支援センター
03-5363-3285(直通)

「PSAスクリーニングキャンペーン」開催

当院では泌尿器科が中心となって前立腺がんの早期発見、適正治療をめざすために、「PSAスクリーニングキャンペーン」を2013年より実施しています。今年は以下の日時に開催いたします。(要事前予約 参加費・無料)

開催日：11月25日(日)午前
会場：北里講堂(慶應義塾大学医学部 北里記念医学図書館2階)
内容：公開講座・問診および採血検査

お申し込み・お問い合わせ
医療連携推進部
(PSAスクリーニングキャンペーン事務局)
03-5363-3877(直通)

がんの親をもつ子どもサポートチーム Supporting Kids of Parents with Cancer : SKiP



看護師長 近藤咲子(SKiP代表)

(写真左)

近年の結婚年齢や出産年齢の高齢化により、がんと診断時に18歳未満の子どもがいるがん患者が増えています。がんである親は、自分の病気を受け止め治療に取り組みだけでなく、子どもへの対応に悩んでいます。一方で、その子どもたちは親が上手に隠しているつもりでも、親の変化を敏感にキャッチして、子どもの特徴として最悪なことを想定してしまう傾向からストレスフルな状況に陥っています。そのような状況の親子への直接的な支援、親が病状を伝えること、伝えたい子どもがうまく対処するための支援ができる医療者を育成・支援するために、多種有志でSKiPをつくり活動しています。がんという病気と治療、親ががんであるために起こってくる気持ちへの対処について知ってもらえるよう、「夏休みキッズ探検隊」を、親が子どもに病気を伝えた後の支援として「日本版CLIMB®プログラム」を実施し、がん患者の親とその子どもが、がんと共に生きていけるよう支援しています。



近年の結婚年齢や出産年齢の高齢化により、がんと診断時に18歳未満の子どもがいるがん患者が増えています。がんである親は、自分の病気を受け止め治療に取り組みだけでなく、子どもへの対応に悩んでいます。一方で、その子どもたちは親が上手に隠しているつもりでも、親の変化を敏感にキャッチして、子どもの特徴として最悪なことを想定してしまう傾向からストレスフルな状況に陥っています。そのような状況の親子への直接的な支援、親が病状を伝えること、伝えたい子どもがうまく対処するための支援ができる医療者を育成・支援するために、多種有志でSKiPをつくり活動しています。がんという病気と治療、親ががんであるために起こってくる気持ちへの対処について知ってもらえるよう、「夏休みキッズ探検隊」を、親が子どもに病気を伝えた後の支援として「日本版CLIMB®プログラム」を実施し、がん患者の親とその子どもが、がんと共に生きていけるよう支援しています。

〈受付時間・休診日〉

外来診療受付時間 午前8時40分～午前12時、午後1時～午後4時
面会時間 (平日) 午後3時～午後7時
(土・休日) 午後1時～午後7時
休診日 日曜日、第1・3土曜日 / 国民の祝日・休日 / 年末年始(12月30日～1月4日) / 慶應義塾の休日(1月10日、4月23日)

〈診療担当医表〉

このQRコードをスマートフォンなどで読み取っていただくと診療担当医表がご覧になれます。なお病院入り口脇の電子掲示板にも掲載しています。

